
調 査 研 究

マッケンロートの人口理論—その紹介 ならびに社会学的・人口学的検討—(3)

皆 川 勇 一

Gerhard Mackenroth's Population Theory (3)

Yuichi MINAKAWA

(Continued from No. 86)

In the fifth chapter the principles and some remarks of Mackenroth's population theory will be reviewed in the sociological and demographic contexts. The main work here is to discuss Mackenroth's sociology of *Ausdrucksverstehen* which constitutes the basic frame of reference of his population theory.

In his theory of *Ausdrucksverstehen* Mackenroth laid emphasis on the following three points: 1. *Sinnverstehen* of social phenomena; 2. the grasp of the irrational side of meaning; 3. the grasp of meaning from the whole *Gestalt*.

The first point mentioned above is the emphasis on the dichotomy of sciences emphasizing on the speciality of socio-cultural sciences and opposing a simple application of methods of natural science to social facts.

The second point is the grasp of meaning as unconscious expression of human action opposing the way of rationalistic grasp of meaning represented in Max Weber's *gemeinte Sinn*. By the third point is meant the emphasis on the grasp of meaning from the whole opposing the causal analysis of motives in individuals.

In the background of such emphasis of *Ausdrucksverstehen* in Mackenroth's theory there seems to be the dichotomy in Dilthey's theory, understanding sociology of Max Weber, psychological theory of Klages and *Sozialstil* theories.

The writer reviewed the relations of Mackenroth's theory of *Ausdrucksverstehen* to those theories.

(To be continued)

目 次

は し が き

第一章 表現理解としての社会学

- 1 意味理解について
- 2 表現の二つの側面
- 3 目的と表現
- 4 目的連関と表現連関
- 5 目的理解と表現理解
- 6 意味と因果性
- 7 意味連関の刻印力
- 8 <das Soziale>における表現原理の形而上学

第二章 人口様式の理論

- 1 史的社会的的人口理論
- 2 意味連関としての人口様式
- 3 人口様式と全体社会
- 4 人口様式と経済様式
- 5 人口様式の歴史的な性格

第三章 西欧社会の人口様式

- 1 古い（工業化以前の）人口様式
- 2 新しい（工業化段階の）人口様式——その1 歴史的考察
- 3 新しい人口様式——その2 現代的考察
- 4 新人口様式の構成要因
(1)生理的要因 (2)性および家族倫理 (3)社会制度的要因 (4)個人的要因 (以上第85号)

第四章 人口と経済

I 工業化以前の資本粗放的経済における人口と経済

- 1 純粹の農業段階
(1) 経済人口学的方程式（理論的設定）
(2) Urarmut の段階（経験的考察 その1）
(3) 工業化以前のヨーロッパ農業の段階（経験的考察 その2）
- 2 原初的な工業的上層部分の成立

II 工業化段階の資本集約的経済における人口と経済

- 1 資本集約的経済における人口（理論的考察）
(1) 人口の増加圏
(2) あい路問題
(3) 古いかみ合わせの解体
(4) 技術発展と労働力排除
(5) 組織行政部門の肥大化
- 2 ヨーロッパの人口増加の波の経済的基礎（経験的考察）
(1) 農業生産性の上昇
(2) 工業的上部構造への人口吸収
(3) 海外移住と輸出産業の形成
(4) ヨーロッパの出生曲線の転換——人口学的空洞の形成

III 将来の人口すう勢

（以上第86号）

第五章 マッケンロート人口論の社会学的・人口学的検討

I 表現理解をめぐる諸問題

1 Diltthey およびドイツ西南学派における社会文化認識

2 Max Weber の理解社会学

3 表現理解の立場・発想の源泉

4 表現理解の検討

(1) Georg Weippert の所説

(2) Werner Ziegenfuss の所説

(以上本号)

(3) 表現理解の社会学的諸問題

(以下次号に掲載予定)

(4) 表現理解と人口様式

II マッケンロートの人口論

第五章 マッケンロート人口論の社会学的・人口学的検討

第一章から第四章まではなほ大きなスペースを割いて、マッケンロートの社会学理論および人口論の概要を紹介して来た。以上の行論によっても分るように、彼の立論は社会の基礎的把握から人口現象の個々の事実の説明に至るまで、すこぶる首尾一貫した体系的構成をなし、社会学的基礎理論の領域にも人口研究の方法ならびに実証にも多くの鋭い問題把握とちみつな論証がみられる一方、これらの理論実証をめぐる様々の異説に対する鋭い論争を提起している。この意味でそれは理論研究と実証分析の相即の数少いすぐれた見本の一つであると同時に、社会科学的認識の多側面にわたる論争書でもあるわけである。そこには人口研究の実証部門における多くの新しい観点および問題把握が与えられていると同時に、社会科学的人口論が真剣にとりくまねばならない認識論的・方法論的諸問題もまた示されている。

そこで以下マッケンロートの人口研究における理論および実証が提起する諸問題を、彼がそれに依拠しあるいは逆にそれを批判するという相反関係において共に彼の問題提起・理論形成の発端をなした先行思想・理論と関連させながら検討し、彼の理論構想ならびに事実確定の意味と問題点を明らかにして行きたい。その際彼の人口研究の社会学的基礎部分と、人口認識の方法ならびに実証部分とに問題を分けて考える方が、これまでの論述との関連においても好都合と思われるので、まず最初に人口研究の基礎的枠組を提示する表現理解をめぐる諸問題の検討から入ることにしよう。

I 表現理解をめぐる諸問題

彼の表現理解の構想については、すでに第一章でその大要を示した。ここでの彼の主張の力点は、ほぼつぎの三点におかれていた。

1. 社会事象の意味理解 2. 意味の超越論的把握あるいは合理主義的把握に対置される内在的即物的把握 3. 意味の全体の Gestalt からの把握。1はいわゆる sinnblind な自然科学的方法による社会事象の把握に対する意味理解の主張である。社会事象の意味認識は Diltthey 以来の自然認識と社会文化認識の二分法に由来するもので、ドイツの社会文化科学の基礎理論に広汎な影響を与えて来ている。とくに人間行為の意味理解から出発する理解社会学においては、“意味”と“理解”は、彼等の学問論と研究方法を規定する基礎的範疇として重要な意義をもっていた。マッケンロート自身もこの理解社会学の系譜に属する一人であるが、彼はその意味理解において、社会ダーヴィニズムに見られるような“淘汰”と“適応”による社会の超越的意味解釈に反対する一方、さらに重大な意味解釈の

誤まりとして、理解社会学の創始者 Max Weber における“gemeinte Sinn”という意味の合理主義的把握に反対し、無意識で非合目的な決して合理主義的にはとらえられない意味の側面、すなわち、意味の目的側面に対する表現的側面を重視し、ここに社会学の中心問題があると考えた。これが表現理解の立場にほかならないが、これと関連して表現理解には今一つの、つまり第三の、全体からの意味把握の主張が加わる。マッケンロートは、これを自然科学における要素的諸部分からの分析的説明に対照される社会科学的認識の特徴と規定すると同時に、Max Weber における意味の合理主義的理解とむすびついた個人主義的動機因果的認識方法に反対し、個々人の社会的行動の gemeinte Sinn にもとづく動機因果的理解には決して還元されない社会全体の構造を、むしろ社会的生の形式の形態的統一 (gestalthafte Einheit) すなわち社会様式 (sozial Stil) の認識から捉えようとした。しかも社会様式・文化様式のこの形態的統一は、かれのいわゆる意味の表現連関として存在するものである。そこでここに“表現”と“様式”を基本範疇とする社会・文化様式の表現理解の社会学が成立するわけである。

マッケンロートのこの表現理解の検討に立ち入る前に、いま一度、彼が依拠しあるいは批判した先行諸理論とマッケンロートとの関係を検討し、彼の理解ないしは批判の妥当と限界とを明らかにしておくことが、問題のよりよき理解のために必要であろう。そこで上述の三つの主張にもっとも関連の深い、Dilthey および西南学派の社会・文化認識の立場、Max Weber の理解社会学、さらにマッケンロートの表現・様式範疇の発想の源泉をなす Klages の表現理論、および社会様式論について、簡単にふれておくことにする。

1 Dilthey およびドイツ西南学派における社会・文化認識

マッケンロートにおける社会文化現象の意味把握の主張は、裏返せば計量的・自然因果的方法の社会科学への無媒介の適用に対する批判に他ならない。だが近代における科学的認識の発展において、いち早く科学的体系と方法を発展させた自然科学は、社会現象の科学的認識にも一つの模範を示すものと理解され、自然科学的方法の社会現象への適用が試みられたことも当然の成行であった。Comte・Mill・Buckle などの歴史研究における自然科学的方法の導入や、Spencer・Taine の連想心理学はその典型的事例といえよう、だが元来人間係数の現象として、自然現象とはさまざまな異質な面をもつ社会現象への素朴な自然科学的方法・法則の適用はそのアンチ・テーゼを生み出さずにはおかない。Dilthey における自然と精神との对象的区分、および「自然を我々は説明し、心的生活を我々は理解する」⁸¹⁾という方法論的区分は、この自然主義的一元論の拒否を表わしている。Dilthey は人間の生の体験・表現・理解の連関の世界を自然に対する精神の世界として規定した。そして自然は我々に対して黙してかたらず知られないものであるが、社会における事実は内的に理解できるものであり精神科学にとっては理解がもっとも妥当な方法であることを主張した。このばあい理解は、内的体験の直接理解という形だけでなく、生の客観的表現である客観態(言葉、身振り、作法、芸術品など)を通しての媒介的理解の形でも行われる。そして生の表示を通しての媒介的理解こそ社会的歴史の全体を理解を可能にする。だが彼は、社会・歴史の全体の総合認識を主張したのではなく、生の体験・表現・理解としての歴史的社会の現実を、個人・文化体系・および社会とその内部の個々の団体の外的組織としての共同体に分け、それぞれを対象とする個別的精神諸科学の必要をといた。そして歴史的社会の現実の全体認識は存在せず、歴史的社会の生の連関の全体は、精神諸科学の各々の探究する個別の連関に解体され、この部分認識の認識論的自己省察(いわゆる歴史の理性)による相互関連の認識から全体認識が漸次実現されると考え、Comte・Spencer のような総合社会学の原理的不可能・不必要をとき、ただ社会の外的組織に関する精神科学の一つとして社会学をみとめた。それは社会関

係のもとで人間の心的生活がとる諸形態を研究する科学であり、Simmel の立場に近似している。

単に自然と精神の二分論にとどまらず、体験・表現・理解の関連に関する Dilthey の理論が、マッケンロートに直接多くの影響を与えていることは、すでに第一章でみた通りである。社会学の問題領域に関する Dilthey の対象規定は、いちぢるしく形式社会的なものであったが、彼が「個体・共同体および生と精神とが宿っている作品」⁸¹⁾などに表出されるものと考えた生の客観態 (Objektivierung des Lebens) の概念は、マッケンロートにおける社会的生の形式の範疇の直接の母胎をなしたと考えられる。

ただここで注目されるのは、Dilthey における自己を表出する生は、人間の意思・感情・知性が切り離されず連関的に働いている全人間本性の経験そのものであるが、マッケンロートはこれを Das Seelisches として規定していることである。これと関連して生の諸々の表現である客観態も、Dilthey のばあい、客観的精神 (もちろんこのばあい、それはヘーゲルにおけるような超越的概念ではなく、人間の体験に密接な関連をもち経験的内在的に把握しうるものである) として把握されているが、マッケンロートはもっぱらその霊的表現としての意味を強調する。

マッケンロートのこの規定が Klages の影響によるものであり、Dilthey 理論よりのこのような分離が Weippert の批判の基本的問題点となることは後に述べる。

自然↔社会の二分論は、さらに西南学派の Windelband, Rickert によっても主張されている。西南学派のばあいは、Dilthey が対象区分から出発するのに対し、認識的方法的差異を強調するものであることは、ここであらためてとくまでもない。西南学派のこの考えは、マッケンロートとは直接のつながりはないが、西南学派の認識論が理解社会学の形成者である Max Weber の方法論とくに Ideal-typus の概念に大きな影響を与えた点が重要である。

[注] 81) Wilhelm Dilthey : Gesammelte Schriften V. 180ページ.

82) Wilhelm Dilthey : Gesammelte Schriften VII. 146ページ.

2 Max Weber の理解社会学

Max Weber は「Wirtschaft und Gesellschaft」の第一章社会学の基礎概念において、社会学を「社会的行為を意味的に理解し、これによってその経過と結果とを因果的に説明しようとする一つの科学」⁸³⁾と規定した。ここには社会学の対象と方法について三つの重要な指摘がなされている。すなわち社会学は社会的行為についての科学であること、社会学は行為の意味を理解する科学であること、さらに行為を因果的に説明すること。

Weber 社会学の出発点は個人とその行為である。「理解社会学は、個人とその行為を基本的な単位として考察する。もし異議の多いことを覚悟でひとたびかかる比較を敢えてするならば、「原子」として考察する。この方法においては、個人はかくて一番の限界点であり、意味をふくんだ行為の唯一の荷い手である。……一般的にいえば、「国家」、「社会集団」、「封建制」やその他の類似の概念は、社会学にとっては人間の相互関連行動の特定の範疇をあらわすのである。したがって、これらの諸概念を「理解可能な」行動へ、すなわち関与した諸個人の行動へ例外なく還元すること、これが社会学の課題である」⁸⁴⁾

マッケンロートによって非難されることになるこの方法的個人主義⁸⁵⁾の強調は、個人や制度などを「時代精神」あるいは「世界理性」などの表現として、より包括的な全体から説明しようとするヘーゲル・ランケ以来の伝統さらに直接には彼の歴史学派に対抗して行われたものであり、Dilthey における理解もまさしくこのような伝統を継承していた。

ヘーゲル的な超越的概念の措定に反対し、歴史的・社会的生の総合的把握を否定したにもかかわらず、歴史的理性における認識論的自己省察による部分認識の共通基礎の分析的自覚からの全体認識への前進が Dilthey の課題であった。つまり彼のばあい部分認識はあくまで全体関連の内における部分認識を意味した。

なお Weber のこのような態度の根底には、経験科学における総合的把握を拒否する実在の無限な多様性という Rickert 的な認識論が前提されている。この点は理念型の説明のさいに再論したい。

Weber における理解の方法は、この意味で Dilthey におけるそれと正に逆の機能を与えられるのであるが、理解そのものの内容も Dilthey のばあいよりさらに限定されたものとなる。もちろん Weber においても理解はあくまで道徳あるいは文化科学に独自の方法であり、人間行動およびそれに関連した意味的世界に対してのみ適用される。だが Dilthey のばあい、それは生の体験あるいは表現の理解であったが、Weber の理解の対象は、行為者または諸行為者によって主観的に思われた意味に限定されるのである。

社会学が対象とすべき行為を、このように主観的に思われた意味とむすびついた行為に限定する態度は、Weber 社会学の第二の特徴すなわち方法的合理主義⁸⁶⁾ につらなるものと考えられる。Weber のこの規定により、社会的理解の対象は、人間の行為に關聯した一切をふくむ Verhalten のうち、理解され得る意味と結びついた行為、すなわち Handeln に限定される。彼はこのような有意味的 Handeln と対照的な gemeinte Sinn と結びつかない行為の極限概念として、「まったく反射的な Sichverhalten」を措定しているが、Weber も指摘するように実際には両者の境界はまったく不明確なものであり。彼自身も単なる模倣、まったく伝統的な型に従って行われる行為、まったく激情的な行為も、有意味的に方向づけられた行為の限界内に入るばあいもあると考えている。だがここでの Weber の意図は、マッケンロートの指摘のように、行為の意識的合理的側面の理解を、彼の理解社会学の中心にすえることにあったとみてよい。

なおこのような行為の主観的に思われた意味からの理解が、Weber における行為の動機的理解をも規定していることも、一言しておく必要がある。すなわち Weber では、行為の思われた意味を中心に、この思われた意味と結びついた行為に対し目的手段の關係にあるもののみが意味理解の対象とされ、それ以外の現実や状態は、没意味的な現象としてただ人間行為の機縁・結末・促進または阻害として考えられるに止まる。すなわち主観的にはかならずしも目的ないし手段として意識されずしかも行為の決定に参与している客観的諸条件や、行為のもたらす客観的諸結果は主観的に思われた意味と結びつかない没意味的なものとして意味理解から排除されることになるわけであるが、このような主観主義的行動理解から、行動の動機因果的把握が生ずるのは当然であろう。マッケンロートは、Weber における動機因果の考え方が、意味の合理主義的把握から生じたと考えているが、筆者はむしろそれが彼の主観主義的行動観に基づくものと理解する。

さて、理解社会学の対象規定においてすでに明らかにされた Weber の方法的合理主義の態度は、社会的行為の類型区分にも貫ぬかれている。Weber は社会的行為の類型を、行為とむすびついた「思われた意味」における動機連関にしたがい、目的合理的・価値合理的・感情的・伝統的の四つに分類したが、それは行為の目的、手段および副次的な結果の合理的考量の度合を基準として区分されたものであった。ここで目的合理的行為に、行為理解における最高の Priorität が与えられていたことは明らかである。何故ならそれは「外界の対象についての、また他人の Verhalten についての期待を通して、またこの期待を合理的にえらんだ結果のための条件または手段として利用することにより、固有の目的をとげようとする行動」⁸⁷⁾として、いいかえれば、自分の選んだ固有の結果をうるためには

どんな手段と条件が最適であるかをたえず考える、すなわち行為を目的手段の系列において計量する行動として、それについては知的明証をともなった理解が可能であり、その経過も一義的に理解できるという方法的長所をもっているからである。Weber においては、合理的に方向づけられた目的行為の解明は、それぞれ適用された手段の理解にとって最高度の明証をもっており、それ故、それはあらゆる種類の非合理性によって影響される現実の行為を、純合理的態度のばあいに期待される経験からの偏倚として理解するのに役立つものと考えられていた。理念型による行為分析も、このような方法的合理主義から出発するものであることはいうまでもない。

Weber における理解がこのような特徴をもっているにしても、彼が Dilthey 以来の自然科学 \leftrightarrow 文化科学の二分論を、その根底において継承していることは明らかである。だが社会文化事象が自然事象とその性質を異にするにしても、それ故に文化科学が個別的・一回的なものを研究する個性記述の学にならねばならぬとするなら、社会文化認識における法則性は如何にして確保されるだろうか。一面における特殊歴史的諸問題への深い関心にもかかわらず、Weber は因果的説明を科学の法則性・客観性確保のために不可欠なものと考えた。とくに普遍化的文化科学として、社会現象における類型的・反復定型的要素を対象とし、事象の普遍的規則を求める社会学のばあい、法則性の確保が重要な意味をもつことはいうまでもない。第三の社会的行為を因果的に説明するという規定は、自然科学におけるような要素化数量化をともなう因果認識の困難な文化科学における因果性設定の要請にこたえるものであった。先き廻りしていえば、Weber は一方において自然的因果乃至法則的因果と類的乃至個別的因果を基本的に区別し、後者については客観的可能性判断 (Das objektive Möglichkeitsurteil) を媒介とする帰属的因果 (zurechnende Kausalität) により、必然的因果 (notwendige Kausalität) から区別される、適合的因果 (adäquate Verursachung) が成立すると考えた。そしてその際社会事象においては、自然事象とことなり動機連関が、この因果認識のプロセスの必須の要件とされた。何故なら、人間の行為を対象とする社会科学においては、自然科学におけるように、単に事象の表面の観察だけによって因果の説明がなされるばあいに比べ、理解的説明にまですすむことができる。これこそ社会学的認識に個有の特性であるが、この理解的説明こそ、行為者の内的経験に立ち入り動機にまでさかのぼった行為の理解に他ならないからである。したがって行為を因果的に説明するとは、行為と結びついた *gemeinte Sinn* における動機の意味連関における適合的因果を確定することに他ならない。

このような社会的因果の確定において、所謂理念型の設定が重要な意義を荷うことになる。だが理念型は単に因果確定の手段としてのみならず、社会文化研究の全過程において、重要な役割を果すものであるから、ここでその概念と一般的意義について少しくわしくふれておくことにしよう。Weber における理念型の概念を理解するためには、ドイツ西南学派の一人 Heinrich Rickert の認識論にまでさかのぼってみなければならない。それは理念型の発想の源泉であるだけでなく、Weber 社会学の先にあげた特色すなわちその個人主義的合理主義的アプローチをも根本において規定していると考えられる。

Rickert の自然 \leftrightarrow 文化認識の差違に関する根本思想は要約すればつぎの様なものである。すなわち感覚的に認識できる世界は無限であり、いかなる認識も世界をそのまま復元することは出来ない。それ故科学は物理学のように不断の繰り返しにもとづく普遍的なものを選択するか、或いは歴史学のように価値と関連しわれわれの興味をひくものを現実から選択するか、のいずれかによってこの無限性を克服する。このようにして普遍的法則を追求する自然科学と、個性的価値を荷う一回的出来事を探究する文化科学との対立が生れる。

Weber は、この認識可能な世界の無限性と価値関係づけ (Wertbeziehung) にもとづく選択の思想を Rickert からひきついだ。だが彼は歴史把握の独自性と客観性を同時に論証しようとする。この要請に答えるものが理念型に他ならない。社会文化事象の認識において、人は各人のもっている価値理念の光で社会現象を照し、光のはねかえってくる部分、つまり各人の「関心」に値する部分を切りとってくるが、このえらび出された実在の一側面を、思惟において一面的に高昇し、内的に矛盾のない整合的な理念像に構成したばあい、これを理念型という。したがって理念型は、一つの思惟によるユートピアであり、個々の現実とは合致しない。それは実在類型ではなく純粋な思惟像を意味する。だが文化生活そのままの客観的分析は存在しない。文化科学的研究は、こうした理念型を構成することにより、使用概念の一義的な明確化が可能となり、それによって現実の特徴づけを適確に行うことができるようになるし、(理念型の術語的機能) また理念型を起点として現実の姿を測定あるいは比較し、(比較的索出的機能) また社会的現実における因果適合を明らかにすることにより、(因果帰属の手段としての機能) 法則的理解に達することが出来る。

理念型は Weber のばあい、このように文化・社会科学における概念・範疇形成から、現実の比較分析、さらには因果関係の確立に至る研究の全過程において重要な役割を果たすものとして考えられている。事実 Weber のすぐれた一連の包括的歴史社会学的研究は、この理念型の巧みな使用の上に行われたものであった。たとえば近代資本主義 (賤民資本主義に対する産業資本主義)、プロテスタンティズム (予定説・恩寵説・禁欲主義) などについての理念型から資本主義の成立を説明したことは、有名なその一つの事例である。

理念型の設定は人間行為の意味理解および因果説明においても、もちろん重要な役割をもっていた。理念型の設定が、現実行為の理解の手段としても、また社会的行為の分類のばあいにも重要な機能を果たすことは明らかであろう。現実の行為におけるさまざまな非合理的要素や外的事件の偶然的干渉による歪みや妨害など、意味とは関係しない諸側面を思想的に切り離すことにより、それらがもたらす一切の歪みや妨害をとりさって、はじめて我々は最高度の明証をもった合理的な行為を設定することができるが、これは合理的な行為の理念型にはかならない。しかもこのような合理的な行為の理念型を設定することにより、行為に影響するあらゆる非合理的な感情的に制約された態度の意味連関も、純目的合理的な経過からの「偏差」として研究し叙述することが出来るようになる。Weber の社会的行為の4つの分類も、行為の目的手段への方向づけという観点から思惟的に形成された純粋に概念的な理想型であり、実際の行為が、せいぜいこれらに多少とも近似しているか、あるいはこれらの混合として存在していることは、Weber も指摘した通りである。それにもかかわらず、こうした行為の方向づけに関する理念型の設定は、現実の行為の比較分析に非常な有効性をもつことは論をまたない。

それでは最後に社会的行為の因果理解における理念型の果たす役割についてふれておこう。その前に行為における因果関係とはそもそもどのようなものだろうか。

行為の思われた意味の理解について、Weber は意味の現実的理解と説明的理解とをわける。このうち説明的理解によって、我々は行為の行われた意図ないし所以、要するにその動機から行為を理解する。Weber は動機を「行為者自体ないし観察者からみて、行為の有意味な根拠 (Grund) と思われる意味連関」と定義しているが、このような動機の把握、すなわち理解的に解明しうる動機決定の意味連関のうちに、行為の思われた意味を組み入れることが、行為の動機的因果帰属にはかならない。そこで Weber のばあい行為の経過は原因—結果の関係から、動機—結果の関係として理解されることが注目される。

さてこのような社会的行為の動機的因果帰属につき、Weber はつぎのようにのべている。

「具体的行為の正しい因果的な説明とは、その外的経過と動機とが的確であり、同時にその連関が有意味的に理解的に知られることを意味する。類型的行為（理解される行動型）の正しい因果的な説明とは、類型的とされる経過が（ある程度において）意味適合的に現われるとともに、（ある程度において）因果的に適合的として確定されることを意味する。意味適合性を欠くとすれば、経過の（外的、心理的を問わず）どんなに著るしい、また数的にその蓋然性が正確に示されるような規則性をもつとしても、それだけでは理解しえない（あるいは不完全にのみ理解される）統計的な蓋然性をあらわすだけである⁸⁸⁹。他方、社会学的認識そのものの意義からしたならば、最も明証的な意味適合性も、行為が事実的に相当程度の反復性または近似性（平均的にまたは「純粹」なばあいにおいて）をもって、意味適合的な経過をいつも示す一つの（とにかく附与の）チャンス存立の証明となる限りにおいて、正しい因果的な表示とされる。社会的行為の理解される思われた意味に合致する、かかる統計的な規則正しさだけが、（ここで用いられる語義における）理解される行為型、すなわち社会学的規則（soziologische Regeln）である。」⁸⁹⁰

Weber は以上のように、理解されずただ観察されるのみである自然科学における必然的因果とはことなり、人間行為の意味理解によって成立する理解社会学における因果性を、いわゆる因果的適合のほかさらに意味的適合がそなわったばあいにはじめて成立するものと考えた。これを適合的因果とよぶことは前にのべた通りである。すなわち、自然科学における必然的因果とは、そのもっとも厳密な意味において、事象間の共存継起関係が、つねに例外を許さずに成立することを意味するが、たとえこのような厳密な関係ではないにしても、社会事象においても事象の共存継起が蓋然的な意味で成立しているばあいがある。だがこのような経験規則が存在したとしても、我々の普通の思考習慣から正しいと見似され得るような類型的連関として、意味的に理解しうるようなばあいでなければ、つまりそれが意味適合性をもっていなければ、それは社会学的規則とはならないのである。

このような意味適合性の判断を、Weber は客観的可能性判断とよぶ。客観的可能性判断は、ある状況（条件複合体）の下である事象の成立しうる可能性がどこまであるかを示すものである。この可能性は一般に一義的には示し得ず、この点確率と同様であるが、人間の行為に関するばあいには一般に明瞭な数値的表現をもつことはできない。Weber はこれを Chance とよんでいる。

このような Chance の判断すなわち行為の客観的可能性判断のためには、(1)心理実験 (2)統計 (3)社会学的比較研究 (4)思考実験などの方法が用いられる。この内(1)はごく特殊なこれに適合したばあいだけに、また(2)は計量することができその帰属がはっきりしている大量現象のばあいにだけ用いられるにすぎない⁸⁹¹。(3)は「動機」「機縁」をことにした諸現象の比較として社会学の重要な課題であるが、成果はなお少い。そこで因果帰属に達するには、「思考的実験」という不確実な手段だけが用いられる。すなわち動機決定連鎖の個々の要素を思想的に押しすすめてそこに起りそうな経験を構成することによって、それを検討する。だがこれも理念型の適用に他ならない。すなわち我々は行為の因果帰属を、それと結びつくと考えられるあらゆる可能な因果関係の理念的設定による Kasuistik により検討し、因果帰属の客観的可能性判断を行うことにより、意味的に適合的 (sinnhaft adäquat) な動機を発見することができる。これがさらに経験的にも検証され因果的に適合的 (kausal adäquat) であることが検証されたばあい、行為における因果性がはじめて証明されることになる。もちろん(1)~(3)においても、検証さるべき個々の動機的因果帰属において理念型が概念装置として大きな役割を果すことはいうまでもない。

Weber における因果帰属の論理的構造はほぼ以上のようなものだった。Weber を直接対象としない本稿ではあまりに微に入り過ぎた観もないではないが、これはマッケンロートの様々な批判にもか

かわらず、彼にくらべて Weber の科学論的構成が、ともかく自己の視点の内において如何に精緻であったかをここに少しでも示しておきたいという筆者の意図も加わってのことである。

以上マッケンロートが批判するような Weber 社会学の特徴が、いかなる論理構造のもとに成立したものであるかを、本稿に関連する範囲でごく簡単に明らかにした。Weber が提示した行為の意味理解の方法については、とくにアメリカ社会学における Lundberg, Dodd などの量化主義の立場からの痛烈な批判がなされたし⁸³⁾、また原子論的な個人の態度や行為を分析の出発点とする彼の名目論的接近方法（方法的個人主義）も、社会集団や社会構造の構造的特質を十分に把握しえない、したがってその分析は個人や社会の部分認識にとどまり、類型原子論といわれるように多分に断片的であって真の全体認識にならないばかりでなく、歴史的社會における法則的發展を否定し、發展の論理に基礎づけられない個別事象間の因果認識にとどまる、そして以上のような欠陥の根本をなす理念型による類型化的認識方法の方法的合理主義のために、彼の立場がいちじるしく合理主義的偏向を示している、などの批判が行われている。だがここでは Weber 理論のマッケンロートとの関連を明らかにすることだけが目的であるから、これらの批判的論点の個々にわたる検討には立ち入らない。

Weber の理解社会学は Sombart にも共鳴者を見出し、さらに1920～30年代に若干の同調的労作が現われたが、その後はほとんど継承者が見当たらない。Weber の労作全体の歴史的包括的性格にもかかわらず、理解社会学における方法論的立場は、いちじるしく微視的心理主義的方向に力点がおかれ、その意味では Simmel・Wiese の形式社会学と非常によく似た構成をとっているが、形式社会学がワイマール体制下のブルジョアデモクラシーの時期に一斉に開花したにもかかわらず、1930年代初めの世界恐慌を契機とする資本主義の全般的危機への本格的突入・ナチスの擡頭とともに急速に退潮し、社会の全体的歴史主義的把握を志向する現実主義的な文化社会学にとって代られたと同じ運命を、理解社会学もまた迎ったといえないこともない。むしろそれは行為の社会学的理論に道を開いたものとして、アメリカ社会学における社会心理学的な行動研究や、Talcott Parsons の社会学理論などに大きな影響を与えている。

〔注〕83) Max Weber : *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1 ページ。

84) Max Weber : *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 415 ページ。

85) Weber の個別化観察は、決して個人主義的な価値判断にもとづくものではなく、われわれが最も理解し易く親近な行為は、個々人がそれに附与した意味に結びついた行為に外ならない故に、個人は行為の理解の上限でも下限でもない唯一究極の単位なりとする根本的立場の方法的要請にもとづいている。かくて彼は社会事象を個別的行為に還元し、たとえば国家や諸団体をその成員の行為の可能性(Chance)に関連させ、つぎに行為者が他人の態度に関係し方向づけられている主観的意味に即して、それらを理解し説明しようとするのである。

86) 目的合理的な行為を規準にして、多少とも非合理的な行為の経過を偏り一妨害歪曲一として理解するのが、Weber 社会学の特徴である。だがこのような方法も個人化的方法と同様それはまったく方法的評価にもとづくものであり、目的合理的行為が、もっともよく理解されうる可能性と一義性をもち、経験規則を導出することが容易だからであって、合理的なものが事実上生活上においても優先していると考えているのではない。

87) Max Weber : *Wirtschaft und Gesellschaft*, 12 ページ。

88) Weber はこのような意味適合性を欠いた連関を偶然的連関 (zufällige Verursachung) とよび、適合的連関 (adäquate Verursachung) に対置している。

89) Max Weber : *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5～6 ページ。

90) ここで人間行為の法則理解に対する諸科学の役割についての Weber の考え方をつけ加えておこう、

人間の行為を対象とする歴史学に特に必要なのは、「一般に人間は所与の状況においてどのように反作用するをつねとするか」ということに関する知識である。しかしわれわれはこれに対する解答を心理学ないし社会心理学に期待してはならないと彼は考える。一般に文化科学にとっては価値関係的にきりとられた実在の側面だけが問題であり、したがってこの側面に関する法則—したがって多くの普遍性を期待しえない法則—が合目的である。それゆえここでは法則の認識価値というものは、数量的な自然科学に適用されるような〔普遍化的な〕記述・体系構成の要求に妥協して具体的歴史的な Gebilde の理解を目指すことを犠牲にすることが少なければ少ないほど、また、自然科学の諸部門がその目的のために要求するような、一般的前提を取り入れることが少なければ少ないほど、それだけ大きくなるのをつねとする。しかるに心理学は普遍的に—もろもろの文化要素の価値関係の相違にかかわることなく—精神現象を説明しようとするから、われわれはこれに当面の問題の解決を期待し得ない。(Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 113 ページおよび 276 ページ)

ここで直接問題にされているのは、心理学の社会・文化認識における方法的意義の問題であるが、さらに心理学によって代表される自然科学的思惟と社会文化認識の異質性を前提とする、自然科学的思惟の社会・文化科学への導入の限界が理解される。もちろんここで両者間の異質性を Weber のようにとらえるべきかどうかには問題はある(筆者は自然認識と社会、文化認識は基本的には差違がないと考えたい)が、一方では自然科学的思惟を sinnfremd なものとして排除しながら、他方においてこれを、事実把握の好便な手段として“表現”と“様式”の範疇のもとに安易にとりこんでしまう、マッケンロートにくらべ、この Dichotomy をめぐる問題の考察についてはるかに示唆するところが多いように筆者には思われる。

- 91) 社会・文化現象研究における理解範疇の設定は、Dilthey 以来ドイツの哲学・社会科学界における常識といってよいほどであるが、このような自然と社会の Dichotomy は、とくに社会調査や統計の領域を通して自然科学的思考法が、社会科学的方法論、とくにその研究手段の内にしみこんでいるアメリカにおいて多くの反対論をうみ出した。F. S. Chapin の社会学的計測の理論、L. J. Moreno を中心とする社会計量学、さらに G. A. Lundberg, Dodd, Ogburn, における計量的統計的方法の意義の強調、などはそれを代表するものである。マッケンロートが批判した行動主義も、こうした量化主義的社会把握の典型の一つであった。

このような傾向に対して、Cooley・Mac Iver などの内省的理解の方法を重視する立場もあり、1930年代には Mac Iver の量化主義批判をめぐる、方法論論争が行われたが、計量主義がアメリカ社会科学的思想の主流をなしていることは現在もかわらない。

社会科学の方法論におけるドイツの思惟とアメリカ的思惟とのあいだの対立に関し、実は両者の考える方法論のレベルに大きなへだたりのあることが注目されねばならない。ドイツの思惟における方法とは、科学の本質・性格・その対象領域、概念や法則さらには認識論の立場や範疇組織などを問題とする基礎学問論における方法である。実際の個々の研究を方向づけ、それによってえられた発見事実・経験規則を体系理論に整序することをその機能とする基礎的方法論のこの領域では、自然と社会の对象的異同およびそれに対応する範疇形成や基本的分析方法における異同が検討されねばならぬが、自然と社会の Dichotomy をどこまで押し進めるかは別として、理解の範疇はこの領域では大きな意義をもちうることは明らかである。ところが一方科学研究が、実際の研究過程において必要とする操作的手続・手段・技術の体系—形式論理、実験、統計、調査、分析法など—をとりあげる研究手段としての方法論においては、量化的方法の適用と制限などが当然問題となる。

しかも学問論と研究手段論とは本来相即的な関係において形成展開さるべきものであるが、Mac Iver も指摘しているように、ドイツ的思惟においては、学問論としての方法論意識が過剰であり、アメリカ的思惟においては研究手段としての方法論意識の過剰がみられたことに、この喉いちがいの大きな理由があるように思われる。だがそれ故に研究様式(≡学問論)と研究手段の相互関係を吟味し、それによ

って理論と実証の相即的發展をはかることは社会学の重要な課題でなければならぬ。表現理解としての社会学を、その人口研究の分野における実証と結びつけたマッケンロートの労作も、理論と実証の意識的結合の貴重な事例であり、その結合の妥当と制限を吟味することは意義があると考え、本稿でも、これは筆者にとって一つの重要な課題をなしている。なお以上の論旨は研究様式と研究手段の対応相互依存の検討の必要を提唱し、Max Weber 理論の検討に、そのすぐれた見本を示された中島竜太郎氏の論文：社会的因果設定の論理：社会学評論第4巻1・2号の発想に負うところが多い。

なおアメリカの思惟を代表する理解の方法の批判としては、Theodore Abel：The Operation Called Verstehen, American Journal of Sociology Vol. 54, 1948~49 を参照されたい。

彼はここで、研究方法として理解が実際に果す機能について検討し、それが問題の予備的分析、作業仮設の形成には役立つが、その実際の応用においては、それが個人的経験からひき出された知識に依存しており、新しい知識を与えてくれず、また検証の手段をもたないため、実験・比較研究・大量事象の統計操作、などの客観的方法にくらべ副次的意義しか持ちえないと結論している。

3 表現理解の立場・発想の源泉

マッケンロートの表現理解としての意味把握の出発点は、*gemeinte Sinn* を中心とする Max Weber の以上のような理解社会学の構成全体の批判であった。Weber および Sombart の批判は、*Sinn und Ausdruck* の第一部 *Das Sinnproblem in einigen Richtungen der neuen Soziologie* の第5章 *Der Sinnbegriff der deutschen "verstehenden Soziologie"* で詳細に展開されている。ここで彼はまず Weber 的な意味理解の対象規定によって、何が彼の視野から排除されることになるかを検討する。

Weber の意味理解の対象は個人または個々人の有意味な行為である。この規定によって社会形象 (*soziale Gebilde*) およびそれに附着した行動様式 (*Verhaltenskonstanten*) がまず意味理解の視野から排除される。Weber の個人主義的名目論的立場では、これらは個々人の特殊な行為の経過および連関であるにすぎないから、*Brauch; Sitte; Mode und Konvention; Staat; Markt* などの社会形象やそれとむすびついた行動様式の意味問題は Weber 的視角ではとらえられないことになる。

このような行為の個人主義的把握に加えて Weber の「行為者および諸行為者によって思われた意味にしたがって他人の態度に方向づけられている行為としての社会的行為」の概念からも多くのものがしめだされる。多数者の類似した行為・他人の態度によって影響された行為などは、他人の態度に方向づけられていないものとして排除されるし、さらに主観的に思われた意味と結びついた行為という規定から、単なる統計的規則性としてしか扱えられない純粹の行動様式、全く反射的な主観的な意味と結びつかない態度、さらに単なる模倣、厳密に伝統の型に即して行われる行動、厳密に激情的な行動の多くの部分が、思われた意味の彼岸にあるものとされる。

だがさらに重要なのは Weber の視角からは、行為における思われた意味以外の側面がまったく排除されてしまうことである。たとえば Weber が現実的理解の内に入れている怒りの発作は、決して思われた意味の理解ではあり得ない。何故なら怒りの発作の意味は当人によって意識されない表現行為の *Gestalt* にのみ表われるものであるから。

このような意味理解の対象規定にとどまらずそれと関連した行為の動機的原因的理解も、Weber における意味理解を狭める結果となった。それがしばしば名目上の、合理化された動機理解にしか達し得ないことは、Weber 自身も認めているところである。

かくて Weber 的な意味理解の視角から、Weber 自身が考えていた以上に多くの問題がしめだされると、マッケンロートは考える。そしてむしろ Weber における意味理解の限界外にこそ、意味理解にとっての重要な問題を見出す。「*gemeinte Sinn*」は社会学的に重要な問題をカバーし

ない。」(Sinn und Ausdruck 80 ページ) マッケンロートにおける社会学的意味理解の中心問題は、gemeinte Sinn の視野の外にある意味の表現部分にあることは第一章にのべた通りである。

だが Weber における意味理解の偏狭さは、以上のような意味問題に対する個人主義的・合理主義的・動機論的視角だけによって制約されただけではなく彼が行為の意味理解において採用した理念型的方法によってますます強められることになった。マッケンロートによれば、行為の意味理解のために目的合理的行為の理念型を設定し、現実の非合理的行為を、この一義的な、最高度の明証をもった合理的行為の経過からの偏差として理解しようとする態度は、社会をあたかも目的合理性によってくみだてられているかのように (“Als ob”) 解釈する試みに他ならない。(Sinn und Ausdruck, 83 ページ) しかしこのような方法論も、基本的には Weber の合理主義的視角によって規定されていることはいままでもない。

さて意味問題の Weber 的把握に対する以上のような批判が、マッケンロートの表現理解への方向を根本的に規定したものであった。行為の意味の Zweckschicht と Ausdrucksschicht・Zweckzusammenhänge と Ausdruckszusammenhänge からの二面把握、およびこの両極論的把握における一貫した表現部分の強調、理解社会学の基本的問題領域としての社会的生の形式の表現理解の強調、意味の動機因果的理解に対する意味連関の刻印作用の強調などの発想の源は、すべて Weber の合理主義的、個人主義的方法に対する反撥から出発している。

だが表現理解の立場をさらによく理解するためには、Klages における表現理論⁹²⁾、および社会の形態的統一の把握としての社会様式に関する多くの理論ならびに実証研究⁹³⁾とマッケンロートとの関連を考えねばならない。とくに Klages の表現理論のマッケンロートへの影響は非常に大きい。生の表現ならびに理解に関する Dilthey の理論のかなりの部分が、マッケンロートに継承されていることはすでに述べたが、Dilthey における表現者が Geist であったのに対し、マッケンロートにおけるそれは Das Seelische として規定されていた。これは Klages の表現理論のそのままの継承に他ならない。Seele を Geist に対置し、現実を Seele の表現としてとらえることが Klages の表現理論の基本的課題であった。さらに行為の表現部分および表現理解に関するマッケンロート理論の積極的展開においても、Klages の多くの発想がとり入れられている。表現連関の相貌学的性格も、Klages がその表現研究において指摘したものであった。マッケンロートの表現理解の中核をなす、社会的生の領域における意味連関の刻印作用が、Klages の個人的生の領域における理論の社会領域への応用であったことは、とくに重要な意味をもっている。

以上のような Klages の表現理論につけ加えて、社会的生の形式の領域における表現連関を証明する素材として、さらに文化や経済形態に関する様式研究が、マッケンロートの社会様式の理論に大きな影響をおよぼした。

かくて、Dilthey の生の体験・表現・理解の理論および Max Weber の理解社会学の批判的撰取と、Klages の表現理論の社会領域への適用、社会の形態的統一を証明するものとしての様式研究の利用の上に、マッケンロートの“表現”と“様式”とを基本範疇とする表現理解の理論が形成展開されたのである。

[注] 92) Klages の表現理論については、つぎのような著書がある。

Die Probleme der Graphologie, 1910.

Die Grundlagen der Charakterkunde, 1926.

Der Geist als Widersacher der Seele, 1929~1932.

Vom Wesen der Bewusstseins, 1933.

- Grundlegung der Wissenschaft vom Ausdruck, 1936.
 Die Sprache als Quelle der Seelenkunde, 1948.
- 93) Heinrich Bechtel : Wirtschaftsstil des deutschen Spätmittelalters. Der Ausdruck des Lebensform in Wirtschaft, Gesellschaftsaufbau, Kunst von 1350 bis um 1500, 1930.
- H. Friedmann : Die Welt der Formen,
 System eines morphologischen Idealismus, 1930.
- Alfred Müller-Armack : Genealogie der Wirtschaftsstile, 1944.
- Alfred Müller-Armack : “Zur Metaphysik der Kulturstile” in Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 105 卷 I号
- Gerhard Weisser : Freiheitlich-sozialistische Stilelemente im Leben der Arbeiterschaft, Eine soziologische Untersuchung, 1948.
- Hans Raupach : Bauform und Raumordnung als konkreter Wirtschaftsstil, in : Festschrift für Georg Jahn, 1950.

4 表現理解の検討

以上マッケンロートの表現理解の立場が形成されるまでの経緯を概略辿ってみた。“表現”と“様式”を中核とするこの表現理解の理論を社会学論として検討し、それが人口研究の方法論ならびに実証部分とどのように結びつくかを検討することがつぎの課題となる。

これにとりかかる前に、マッケンロートの意味理解が提起する社会的諸問題を検討する手掛りとして、マッケンロート理論に関する二つの社会的論評をとりあげてみたい。その形成者 (Max Weber) の偉大な名声にもかかわらず、戦後ドイツにおいてもその正統的継承発展がほとんど行われていない理解社会学の脈絡に属する労作であることにもより、多くの意味ですこぶる問題をはらんでいるように思われる彼の著書 Sinn und Ausdruck に関する論評は非常に少く、私の眼にとまったのはつぎにあげる三つのものだけだった。

- ① Georg Weppert : Sinn und Ausdruck in der sozialen Formenwelt—Zu dem gleichnamigen Buch von Gerhard Mackenroth
 Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, Band 66 Heft 2, April 1954
- ② Werner Ziegenfuss : AのIIの8. Soziologie als Verstehen von Gestalten im Wandel des geschichtlichen Lebens und der sozialen Formenwelt, Werner Ziegenfuss 編 Handbuch der Soziologie, 1956年
- ③ Ernest Manheim : Sinn und Ausdruck in der sozialen Formenwelt by Gerhard Mackenroth, American Journal of Sociology, Volume 59 Number 5, March 1954

この内①と③はマッケンロートの書評としてかかれたものであり、③はドイツの社会学教科書 (といっても1,200頁余りの大冊であるが) の内で、Ziegenfuss がドイツにおける社会学の諸傾向について論じているA—II Wesen und Formen der Soziologie の内の一節である。

①の Weppert の論文は、戦後における理解社会学の数少ない継承者の一人として、意味とか理解とかいう範疇には理解が深く、その意味でその批判はすこぶる内在的で、マッケンロートの表現者としての das Seelische という把握を中心に検討がなされている。なお Weppert 自身の立場は、Dilthey—Max Weber—Sombart という理解社会学の展開を穏当にひきついでいるように思われ、彼自身の研究としては、Sombart の Stiltzusammenhänge としての資本主義把握を起点として経済形態の社会的考察を行っている⁹⁴⁾。

②の Zigenfuss のものは前述のようにドイツ社会学を概観するための一章の内の一部であるが、彼はここで人間行為の合理的理解の社会学を第7節におき、つぎの第8節歴史的生の変動ならびに社会的形式の領域における形態 (Gestalten) に関する理解の社会学の中で、社会を単なる対象的意味連関としてとらえる形式社会学の Logos-wissenschaft に反対し、常に生成してやまぬ生の形式としての社会形象の把握を中心とする、現在の科学的自覚としての Wirklichkeits-wissenschaft を提唱した Hans Freyer とともに、マッケンロートを取り上げている。なお彼はマッケンロートにおける社会的形式の形態把握を、個人の行動、社会的定存の変動とならぶ社会学の第三の基本範疇であるとして、マッケンロート理論の社会学的意義を高く評価するのであるが、彼の理論内容についてはその過度の非合理主義への傾斜をすどく批判している。

③ Manheim のものは論評としての内容にはとほしいが、Dilthey 以来の自然・文化認識の二分論を、19世紀初期の近代的合理化と機械化に対する不満の表明であった浪漫主義の継承と考えている点に興味があった。

ここでは最初の二つの論文を手掛りにして、マッケンロートの表現理解の問題点を探ってみることにしよう。

[注] 94) Weippert の理論的立場については、つぎの二つの論文を参照されたい。

“Zum Begriff des Wirtschaftsstils”, Schmollers Jahrbuch, 67 卷。

Werner Sombarts Gestaltidee des Wirtschafts-systems, Göttingen, 1953.

(1) Georg Weippert の所説

Weippert の論文は二部に分れており、Iはマッケンロートの表現理解の批判、IIは彼の Weber Sombart 批評に対する論評が行われている。したがってIIはマッケンロート理論の検討には副次的意義しかもっていないので、Iの部分筆者の理解をも組み入れながら主としてとりあげ、行論のよりよき理解に役立つと思われる範囲でのみIIの部分に脚注で若干ふれるに止めたい。

さて Weippert 自身が理解社会学の系譜につらなる一人であり、とくに Werner Sombart の影響を強く受けていることは前述した通りである。この批評論文の執筆にあたって、彼はマッケンロートとの基本的立場の一致点を強調し、次のようにのべている。「彼がその著書の中で“表現”となづけている所のものを科学的に解明することこそ社会諸科学とくに社会学の中心課題であると考えた点で、われわれは彼と全く同意見である。われわれは彼と共に、Dilthey の偉大な業績が、まず社会学においてさらに正当に評価すべきであると確信している。……さらに意味という現象を取り扱うばあい、つねに経験的に把えることができ、それ故経験科学的に表示することのできる事実が問題である。また経験科学としての社会学の対象以外の意味問題も存在するという点でも、われわれはマッケンロートと同意見である。最後に様式の統一 (Stileinheit) あるいは表現連関という場合、それは単なる概念における統一を指すのではなく“経験的事実としての統一を意味する” (Sinn und Ausdruck 203ページ) という点でわれわれは全く見解を共にする。」 (Weippert 105ページ)

だが Weippert の批判は、まず社会学の中心課題である意味の解釈に対して提起される。“人間社会は意味保有性をすべての生命を持つ自然と共有する” (Sinn und Ausdruck, 12ページ) というマッケンロートの見解は、意味保有性の概念の拡大解釈ではないか? というのが彼の疑問の第一点である。これは“内在の意味としての意味保有性は常に目的に対する生の過程の関係とともに与えられている” (Sinn und Ausdruck, 15ページ) という定式にさらに明瞭に現われている。つまりマッケンロートのばあい、生ける自然の意味保有性は、その目的志向性の内に含まれることになる。このばあい

もちろん彼は生ける自然の合目的性を、人間の世界にしか生じ得ない目的意識とは峻別する。だがこのような区別を行っているにしても、ともかく彼は意味保有性の概念をある目的をもった成長過程一般に適用しようとしているのである。

ところで意味保有性の概念の拡大と同時に、マッケンロートは理解の概念をもまた拡大してしまう。「彼が、生および成長の過程の目的あるいは“Bauplan”による解明を理解と規定するとき、彼はそれが彼自ら欲する所ではないにしても、理解(Verstehen)を説明(Erklären)と同一視しているのである。だが生ける自然の“内的合目的性”には厳密な意味での意味保有性は存在しない以上、自然事象に対して適用された目的論的(teleologisch)観察は、理解の一種類とはなり得ない。理解という観察方法に立とうとするならば、人はそれを目的論的観察方法からきびしく区別しなければならない。」(Weippert 106ページ)

意味および理解の範疇は、社会文化事象の領域のみにかかわる独得の範疇であり、この二つの範疇の定措が理解社会学の出発点をなす。ところがマッケンロートの拡大解釈は、これらの適用範囲を有機的生命一般にまで拡張することにより、社会↔自然の二分論を不分明にし、ひいては精神科学与自然科学との原理的差別をあいまいにする恐れがある。

マッケンロートに対するこのような批判は、理解社会学の正統的立場からは当然予想される場所であるが、意味と理解の適用範囲の外延的拡大は、マッケンロートの中心問題である社会的形式の領域の考察には直接かかわりを持たない。彼の社会学的研究を歪めるもととなったのは、これと表裏の関係にある意味のいわば内包的拡大解釈つまり、無意識的側面をもとり込んだ意味規定、およびそれと結びついた表現概念にあった。

「マッケンロートは他の多くの研究者達とは逆に“意味”と“表現”とを等置しない。このこと自体はたしかに何等反対すべき筋合ではない。」(106ページ)

しかしここに他の理解社会学者の問題把握との分岐点がある。Max Weber のばあい、社会的行為の理解が対象とすべき分野は、行為の思われたる意味の側面だけだった。マッケンロートは、このような意味解釈に包含されない表現分野、つまり表現の無意識的側面にまで表現の問題を拡大した⁹⁶⁾。それは、表現を、自己自身を表現する者と、それによって組立てられる表現分野に分け、表現分野に自己を表現するものを das Seelisches とした彼の規定に關聯している。Weippert はマッケンロートの誤りが、そもそもこの das Seelisches の措定に由来していると考えていることは後の所論であきらかになろう。ところでこの表現における二側面の指摘は、人間行為における Willkürhandlung と Ausdrucksverhalten の重層—行為の意味連関における目的連関と表現(=様式)連関の重層、しかもこれらの重層のうち表現部分の一貫した強調に密接につながっている。マッケンロートのばあい、人間行為における目的内容ではなく、表現内容、つまり目的達成の鑄型(Modelung der Zweckerfüllung: Klages の表現)こそ理解社会学(彼のいわゆる表現研究)の対象となる。

このような構想はすでに Klages によって提起されたものであるが、彼が個々の生に対して、つまり個人主体の領域に対して展開した表現の方法を、マッケンロートは社会文化の領域に生産的に適用しようとした。「この観点から彼は社会や文化の様式を、つねに生の目的実現あるいは意識的な目的実現の鑄型と考えた。Sinn und Ausdruck の 106 頁で彼は、これから展開しようとする理解社会学は一種の文化史的な筆蹟学(Graphologie)となるだろうと述べているが、この言葉はマッケンロートが意図する所をかなり明瞭にわれわれに示してくれる。」(Weippert, 107ページ)

マッケンロートの構想について以上のようなスケッチを行い、それが Klages の表現に関する心理学理論の社会への適用であることを明らかにしたのちに、表現理解の立場を支える基本範疇である表

現概念の社会文化領域への適用に関し、Weippert は以下のような問題点を指摘する。

「だがマッケンロートが表現概念に対して与えた規定を厳密に守り、表現の範疇を社会的なものの領域に適用するならば、そこでの表現分野は何かということ。社会・文化の様式がつねに特殊なく霊的なものの表現であること、さらに文化の表現連関あるいは様式連関のばあいにも“不随意的”“無意識な”表現が問題となることが証明されねばならない。」(Weippert 107ページ)

ここでまず第一に問題となるのは、社会文化の領域つまり行動様式・制度などの社会形象や客観態に自己を表現する <das Seelisches> とは一体何かということである。「けれどもすでにここに個人を対象とする表現研究を社会形象にもあてはめようとするばあいの困難が生ずる。人間個々人は psycho-physische Einheit であり、Leib と同時に Seele を持つ。ここでは Leib は Seele の表現分野となり得るが、社会形象は決して psycho-physische Einheit ではあり得ない。sozialen Einheiten それ自体は、Körperlichkeit も Seelhaftigkeit をも欠いている。社会形象に表現分野を求め、社会形象の背後に <霊的なもの> を求めるばあいには、それらはその基体をなす諸個人とその行動に還元されねばならない。」(Weippert 107ページ)

これに対するマッケンロートの解答が Sinn und Ausdruck の第10章 Die Prägekräft der Sinnzusammenhänge および第11章 Zur Metaphysik des Ausdrucksprinzips im Sozialen であったことはすでに第一章で明らかにした所である。ここで彼は決して諸個人とその行動に還元され得ない社会的生の形式：社会的行動様式や社会的制度がいかにして個々人を把えその行動を規定するようになるかを、意味連関の刻印作用から説明している。だがこれは社会→個人への刻印作用をとらえることが出来ても、刻印すべき制度行動様式がどのようにして形成されるかは説明できない。そこでこれらの社会的生の形式に自己を刻印する <das übersubjektive Seelische> の措定がマッケンロートのばあいには必要となるのである。

Dilthey のばあい、このような社会的生の形式は生の客観態として把握されている。しかし彼は一切の形而上学的措定には徹頭徹尾反対の立場をとっていた。Dilthey は Hegel 的な世界精神・普遍的理性による形而上学的構成を拒否し、具体的全体的人間の経験を唯一の实在とし、その分析と記述という方法をとることによって、すなわち下から・個別者から出発することによって歴史的社会的現実を貫ぬく諸々の「連関」に迫って行こうとした。歴史的生の認識においても、歴史哲学におけるような「摂理」「内在的目的」「歴史的形能力」などを彼は受容しない。ただ体験し展望し得る生の連関のみが問題であった。

Weippert 自身はこの社会文化事象の Dilthey 的理解の伝統に立つ、したがって当然 übersubjektive Seele の設定を経験科学としての社会学の範囲外の問題として拒否する。このような形而上学的措定の妥当性如何の問題を一応おくとしても、社会的生の形式あるいは生の客観態は、マッケンロートの言うように <das Seelische> の unwirklich なそして unbewusst な表現にのみ止まるものだろうか。Dilthey においては社会形象・法律書・芸術作品・宗教的教義などは“精神の客観態”であった。社会形象に“人間存在の共同性”が表われるように、偉大なる作品は ein Geistes の表現である。「これら Geistes の理解は決して心理学的認識と同じものではない。それは精神的形象をそれに固有な構造と合法則性に還元することによって行われる。」(Dilthey 著作集、第7巻85ページ)そしてこのばあいの理解は übersubjektive Seele の設定による目的論的解釈や、無意識的なく霊的なものの心理学的解釈ともことなるものとなる。

Dilthey のこの規定を無視して、マッケンロートはここでもうばら、社会的形式を彼のいわゆる超主観的 Seele の表現分野としており、<das Seelische> の無意識な表示としてのみとらえようとする⁹⁰⁾。

「この考え方を厳格に適用すると、社会現象・歴史・文化はもっぱら靈的なものの表現としてのみ問題となり、そのばあいこれらの表現はつねに無意識的なものであることが証明されねばならなくなる。だが私はマッケンロートによるこのような証明を見ることが出来なかった。」(Weippert 108ページ)

たしかにマッケンロートは意味と表現の概念を無意識的非合理的側面にまで拡大しはしたが、行為における意味および意味連関の把握においては、つねにそれを二面性において捉え、その合理的合目的あるいは geistig な側面の存在を否定していない。ところが社会的生の形式を論ずるに至って、もっぱらその表現としての側面のみが注意が向けられ、<das Seelisches>の無意識な表現として、それが把握されている。Weippert の以上の批判はマッケンロートのこの不整合を正しくついているように思われる。「マッケンロートは精神・社会科学において市民権をもっている様式(Stil)概念を最後まで固持しようとした、だが彼はそれをさらに充分に限定したいと考え、それを一義的に彼の所謂第二の意味連関つまり表現連関に附属させることが出来ると信じた。ここで社会や文化の様式を問題にするばあい、表現だけが問題となること、すなわち換言すれば様式や表現の現象そのものは目的追及的意志の直接の結果ではないということは否定され得ない。だがこのばあいマッケンロートがそうしたいと考えているように、表現現象はつねに、それ故原理的に<靈的なもの>の無意識の発現と解釈されねばならぬかどうか？」(Weippert 108ページ)という疑問は正当であるし、「マッケンロートは意味概念を一それを有機体の内的合目的性にまで拡張することにより一余りに拡大したが、今や彼は一表現の世界の現実を誤解したため一表現概念をあまりに狭く靈的存在(seelisches Sein)に結びつけたことが明らかになった。だが対象世界におけるすべての表現が靈的存在の表現ではない。精神的存在(geistige Sein)もまた表現されるものであり、この表現内容もまた無意識に意図されざる所産として成立する。すべての種類の創造物におけると同様に、社会形象の世界に表示されるものは精神的存在である。もしそうでなければ、それは何故目的行為の範疇に組み入れられることが出来るだろうか？」(Weippert 109ページ)という評価も、Dilthey 派の一人として当然といえよう。

だが何故マッケンロートはこのような誤りをおかしたのだろうか。Weippert はそれをマッケンロートがあまりに Klages の理論に傾倒し、個々人における意味的に認識可能な無意識な靈的表現としての心理学的表現概念を、そのまま社会・歴史・文化の諸現象に移植しようとしたためと考える。

この Klages への傾倒がもたらした誤まりは、マッケンロートが行った Geist と Seele の区分ならびにそれと並行して生ずる問題として、二つの意味連関の区分に明瞭にあらわれている⁹⁷⁾。マッケンロートは、自己の Geistiges と Seelisches の区分を、今日の深層心理学における区分と全く一致していると確信しているが、Weippert によると、彼の Geistiges の解釈は、Klages の影響により深層心理学の理論におけるとは本質的に違ったものとなっている。そして他ならぬこの Geist 概念の誤った把握から、先にのべたような誤まりが生ずることになる。

「ここで重要なことは、マッケンロートは Geist を単純に Ratio と等置できると信じ、さらに Ratio を Vernunft と同一視してしまうことである。」(Weippert 110ページ) その結果「随意行為およびそれと結びついた目的連関は、“意識され意欲され思考された合理的性格をもち合目的性という合理的範疇によって理解され分析される”(Sinn und Ausdruck 111ページ)ものとなり、これらは今や Geistigen の側に移されるだけでなく Geistigen と直ちに同一のものと見做されてしまう。それ故このような二分法を基礎にしたばあい、目的行為に還元できないすべての意味連関は靈的なものの表現として解釈されることになる。それ故彼のばあいにはもちろん、目的設定的な意識からは鋭く区別される内在的な Bildverwirklichung は、すべて靈的なものの側に入れられてしまうのである。」(Weippert 110ページ)

その結果「目的設定と全く同じとは言えずしかも霊的な存在から区別される 独得の領域に属する das Geistige を收容する場所は彼のばあいには存在しないのである。」(Weippert 110ページ)「さらにつきのようなばあいが考えられる。目的連関についてのみならず、特殊な精神的形象についても、それらがその精神的内容を超えて霊的なものを表現するばあいである。これらは Seele と Geist (マッケンロートのように Seele と Ratio にではなく) とに区別することが合目的的であるように思われる。」(Weippert 110ページ) Weippert はこれが単なる名称だけの問題でないこと。この用語法の違いが、社会文化領域の諸問題をまず客観的精神の問題として経験的に把える Dilthey 的立場と、それをもつば Seele の表現として把え übersubjektivische Seelisches の措定に向うマッケンロートの立場の分岐を表明していることを強調する。そして最後に社会文化現象の性格規定における自己の立場を積極的に展開しながら、マッケンロートの形而上学的措定について次のように批判する。

「ここでは単なる名称だけが問題にされているという非難も考えられる、われわれもまた用語法が決定的な問題であるとは考えないし、マッケンロートがしばしばわれわれが当然 Geist という用語を用いるようなばあいに、Seele という言葉を使っていることを容認することをためらいはしない。しかしながらわれわれの批判は原理的な意義をもつといわねばならない。ここで問題なのは、Dilthey により、Nicolai Hartmann により、Sombart により、そしてその他の人々によって“Geist”となづけられ、Ratio と同一視することを許されない、かの特別な現象が問題なのである。……われわれは精神を共同性(Gemeinsamkeit)の領域として、精神の現象を人々と人間性を結びつけるものとして、また理解可能性を構成するものとしてとくに“客観的精神”の現象として考える。……

ところがマッケンロートは“客観的精神”の概念なしに済ますことが出来ると信じている。彼が理解社会学にとってかくも重要な現実的現象である客観的精神の諸現象を除外しようとしたまさしくそのために、必要以上に多く形而上学に頼らざるを得なくなったのである。“客観的精神”は現実世界(Realwirklichkeit)の事実として経験科学的に把えうるものであり、Dilthey も N. Hartmann も、Hegel がこの概念に附加した形而上学的要素を排除せんとして努力しそれに成功した。

社会的生の形式・生と文化の様式・客観態の世界をば客観的精神の表現として把えることにより、われわれは厳密に経験科学の枠の内に止まることができるのであるが、マッケンロートは、これらの事実の理解のために übersubjektivische Seelisches という形での形而上学に助けを求めざるを得なかった。そしてそれによって心理学の表現概念を大きな修正をほどこさずに社会的世界に移しかえ、社会学になじませようとする努力が原理的に失敗に帰したのだった。

われわれもまた生産的な概念と考える“社会的表現分野”の概念に関して、マッケンロートはつぎのように書いている。“われわれは霊をもったものについて表現を知ることが出来る。だが超主観的な表現分野が存在するならば、übersubjektivische Seelisches も存在せねばならない。これが基礎的な形而上学である”。(Sinn und Ausdruck 205ページ)……だが超主観的な表現分野が存在するからといって、必ずしもそれを übersubjektivische Seelisches に結びつけねばならない理由はどこにもない。社会的生の形式の中で、個々の存在が“超主観的な表現連関の内に、民族や時代やその他の社会的実在の様式の内に組み入れられる”(Sinn und Ausdruck 205ページ)ということは、われわれを übersubjektivische Seelisches の仮定にすこしも近づけはしない。否。マッケンロートが形而上学にゆだねなければならないと信じたこの部分にこそ、理解社会学の本来の領域が存在するのである。社会的生の形式の内に編み込まれた存在(Eingeordnetsein)と個々の存在のその時々々の位置を分析し、客観的精神によって社会的実在を特徴づけることこそ理解社会学の主要問題である。さらに今一つの主要問題は、諸民族諸時代の様式がどのような形でこれらの諸民族諸時代の客観的精神の表現となっ

ているかを明らかにすることである。いまやここで霊的なもののみ眼を向ける観察方法というものが、人間の共存 (das menschliche Miteinander) Heidegger の所謂“他者との共存”を把握できないことが明らかとなる。社会的形式の意味連関においては、人間の精神存在 (Geistsein) からのみ理解される意味連関が第一に問題となる。同様に文化的創造物も究極的には共存からのみ説明される。それは特定の社会的組織形態あるいは特定の文化体系の地域的・歴史的 タイプ の比較の際に、特殊な霊的なものに注意を払うことを拒むものでは決してない。

結局マッケンロートはそもそもの最初から übersubjektivische Seelisches の仮定から出発したため Klages 心理学の表現科学的見地を大きな変更なしに理解社会学に移植することが出来ると考えたのである。だがこのような観念を捨て去った時にのみ、理解社会学は自己に相応しい位置を保つことができる。」(Weippert 111ページ)

〔注〕95) Weippert はマッケンロートの Weber 批判に対して、つぎのような諸点を指摘している。まず Weber の合理主義的把握は、現実から意識的に隔離された理念型的概念であり、現実の具体的な subjektiv gemeinte Sinn を目的合理的思惟とは等置していない。また gemeinte Sinn を反省・意識・合目的性に限定する必然性も決してなく、そこにはおぼろげな予感・断乎たる良心の要請もふくまれる。などなど。だがこのような指摘では、マッケンロートが自己の立場を明確に表明するために、意識的に Weber の立場を極限的にとらえたということはいえても、Weber の合理主義的把握の根本的限界を救うことにはならない。

なお Weippert は、Weber 社会学の限界が極端な名目論にあるという意見には全面的に賛成し、これが社会形象や文化様式を経験的に与えられた統一として認識することを妨げていると考えている。

96) Weippert はマッケンロートと Sombart の立場の根本的な違いもここにあると考える。Sombart は Max Weber の方法的個人主義から転向して、様式連関 (Stilzusammenhängen) の存在を指摘し、その表現的性格を“統一の意味の鋳型”として特徴づけ、この表現的性格には、いかなる Nominalismus も把握しえない、個々の現象の背後にひそむ何物かがあると考えた。彼はこれを Gotik の精神、資本主義の精神とよんだが、それは Weippert によれば、Dilthey の所謂“客観的精神”に他ならない。Sombart 自身も überindividuellen geistigen Realität という概念をもちこみ、“客観的精神”をそのようなものの一つとして規定している。

97) Geist \leftrightarrow Seele の問題の考察は、第一章における紹介では省略したが、Sinn und Ausdruck の第7章社会的形式における意味の層においてかなり詳細に展開されている。この章で彼は意味連関の二つの側面、すなわち、意欲され意識され思考されたものとして、合目的性の合理的範疇から分析すべき目的連関と、意識されず思考されず体験されるものとして、非論理的心理学的性格の合目的性の範疇から分析すべき表現連関を対置し、この意味連関の二つの区分に対応するものとして、深層心理学における Geistiges と Seelisches の区分にふれるのである。

彼はその考察を、Platon, Aristoteles における三分法から、キリスト教における Leib と Geist の二分法への転化、さらにこのキリスト教的精神優位の流れをくむ、内省心理学における Geist の尊重、Weber, Sombart, Schütz の合理主義的偏向についてふれ、最近ようやく深層心理学の発展とともに、Geistiges の評価における革命的転換が生じ、Geistiges は Psychischen の内における添加物にすぎずしたがって意識の心理学も Psychischen の一つの Schicht だけを対象とするにすぎないものと考えられるようになり、これまでそれが問題にしてこなかった Seele の領域が一つの Schicht として再発見され重要視されるに至ったとのべている。

(2) Werner Ziegenfuss の所説

Ziegenfuss の批判は、同じ理解社会学者の一員としての Weippert にみられた意味・理解・表現と

いった理解社会学の基本範疇をめぐるちみつな論理的内在的批判とは観点を異にしている。彼のばあい社会学者としてのマッケンロートの社会把握の根本態度とその精神史的位置づけが問題であった。

Ziegenfuss はマッケンロートを第二次大戦後における非合理主義的思潮を代表する浪漫主義の継承者として捉える。「マッケンロートは Max Weber に劣らず“意味”概念の解釈に努力した。だが彼は意味を研究者の思惟の内にのみ存在する意味としてではなく事実（tatsächlich）に捉えようとした。このような把握の精神的背景は浪漫主義である。それは第一次大戦後の時期に“目的合理的な”行為および社会の組織と支配における合理的方式と装置というものが如何に無意味なものであるかが明らかにされた反動として再び復興した思潮である。マッケンロートの著書“Sinn und Ausdruck in der sozialen Formenwelt”は、社会学の本質の解釈をこえて、第二次大戦中において目的合理的装置と機構がもたらした、さらに大規模かつより馬鹿げた結果に対する、また戦前まで社会の Formwert として通用し現実を動かしていたすべてのものに対する拒否をあらわしている。」(Ziegenfuss 228ページ)

このようにマッケンロートの基本的思考態度を規定した後に、Sinn und Ausdruck を素材としながら、現代の浪漫主義者としてのマッケンロートの社会・文化把握における非合理主義的性格を、多くは Max Weber の合理主義的把握との対比を通して明らかにするという形で彼の論評はなされる。だがそれは一貫した論旨の論理的展開というよりは、マッケンロート理論に関する学問的エッセーに近い形態をとっているため、なるべく原文そのままの形で紹介することが妥当であろう。

マッケンロートの Weber 社会学に対する反撥は gemeinte Sinn によって捉えられるいわゆる行為の目的連関は社会学的にみて重要な意義を持たぬという主張に明瞭に現れており、それと関連して思われた意味でなく即物的な意味把握の強調が行われている訳であるが、合理主義への反撥を表わすものとして Ziegenfuss はマッケンロートにおける体験の重視をとり上げる⁹⁸⁾。「Freyer によって表明された、構造を有意味に維持し発展する“歴史”に対する信仰はマッケンロートには欠けている。Freyer のばあい、その内にあることが個人にとって歴史の内にあることに他ならず、その内において個人が社会との関連ならびに歴史的な社会そのものを意識するようになる外的状態 (äussere Lage) は意味のないものとなる。Lage や Geschehen は社会的共存の内における理解の視点からは、何等 Situation としての意味を持たない。Lage や Geschehen から如何なる Situation が導出されるかは体験によって決定される。Max Weber はこの命題を否定的にしか解釈しなかった。マッケンロートはこれと対照的に、それを積極的に把握しようとした。彼は Weber 社会学のばあいには合理的思惟にのみ与えられていた意味規定的意義を体験に与えたのであった。」(Ziegenfuss 228ページ)

体験の重視にみられる目的合理性への反撥は、知識と生との相互排反的な関係の指摘にも通ずる。「知識自体が生と相互に反撥しあうという考え方つまり“生と生に関する知識はお互に排除しあう”あるいは“体験されたものは認識し得ない”あるいは“意識的に存続させられたすべての様式は必然的に不純である”といった考え方は、Romantik としての彼の面目を余すところなく表わしている。……ここにわれわれは生を拒否し、美的なものや芸術的なものにおける非合理性を拒否した Max Weber とは正しく反対の態度をみる。」(Ziegenfuss 228～229ページ)

これら若干の問題把握にみられるマッケンロートの非合理主義への過度の傾斜の危険について Ziegenfuss はとくに彼の目的合理性への反撥について次のようなコメントを加えている。「資本家的・経済的思考あるいは抽象的効用概念にみられるような目的合理性に反対して、それは“空想概念”であり、抽象の世界でのみ分離し計量し計算できる感情とか表象とかの心理的要素の量と同じように偽

りの所産であるというのはたしかに間違っていない。だがそれとともにそれらが経済的計算の原理として第一義的意味をもち合理的であるとともに、社会において現実的作用力をもち、とりわけ社会の形式を形成して行く意義をもったものであることを忘れてはならない。マッケンロートの理解の仕方には、彼の意味把握の立場においても否定はし得ず、そのためせいぜい消極的意義づけしか与えられていないが、それにもかかわらずそれによってその現実的意義を決して失いはしない諸事実を認めようとしないうきらいがある。」(Ziegenfuss 228ページ)

次に Ziegenfuss は、意味的世界を目的連関と表現連関という両極概念によって捉えようとするマッケンロートの試みについて次のように批判する。「マッケンロートはだからといって合目的なもの、つねに合理的であるものからの断乎たる方向転換にのみ執着していた訳ではなく、靈的ならびに社会的^{二つ}という二つの層を区別した。だがこの考案もあまり芳ばしいものではなかった。それは概念的に捉えうる実体の差違を譬喩的に、すなわち人間の内で作用している内的連関と相互作用を、異なる領域に向って対照化して示そうとするところみである。だが理解に対してはこのような思考方法は何ももたらさない。それは具体的例証に対する要求と対立するからである。それはマッケンロート自身の思考態度ともそれほど調和してはしななかった。マッケンロートは社会的行動様式の表現部分を靈的内容の経験的に捉えうる表示として理解しようとし、ここで目的連関を第一の意味の層と見做した。だがこのようにして合目的なものが特殊な層としていわば分離されてしまうことから、マッケンロートも知らないではない事実、すなわち合目的なものは靈的なものから切り離されてはならぬ現実に作用する力を持ち得ず、その上それが拒否されるばあいには、それ自身の側から特定の生に適合した形式がたちまち呼び起されるという事実を眼を蔽うことになる。だがどのようにして意味の二つの層が“指示”されるかについてはわれわれは何等することが出来ない。二つの意味の層のあいだの相互的な影響の問題の提起そのものが証明するこの(二つの意味層の両極的対比の)社会学的分析の生産性を強調しながら、そこにあるものは靈的な意味動因が一つの層をなすという定式だけなのである。むしろ合目的性と表現形態の差異を、二つの層に対照化することによって表現しようとするこの方法こそ、この両者を直接理解の領域から分離し、問題を理解できないものにしてしまう元凶なのである。それはむしろ次のように考えるべきだろう。つまり抽象によってのみ“純粹”に合理的なものとして表象することの出来る目的行為は、たしかに表現内容をもたずそれ故活力を持ち得ないだろうが、一方また定存(Dasein)の目的連関の現実においてただ表現保有的であるだけの行為も、非合理的で捉えることができず、この意味で非現実(irreal)なものにしすぎない。」(Ziegenfuss 229ページ)

ここでも Ziegenfuss は非合理的側面の過度の強調がこのような非現実的な意味の両極論的把握に導く原因であったと考えるのであろう。同様の批判的態度がマッケンロートの計量主義批判に対してもなされる。

「社会的生の湧き出る豊富さを、経済社会の数理的把握により、その基本においてはまったく単純な規則や方程式に還元し、それによって問題をせいぜい間違いなく考えることにその全生涯を捧げる人間もあろうが、マッケンロートの見地からすればこのような思考は下らぬものだ、ということが言えるだろう。だが意味連関への志向が放棄されるならば、数学的公式と数学的答が彼の生活内容となるかもしれない、というばあいもまた考えられる。だがここに利益志向による思惟の偽造以上の問題を追及するすべての知識社会学の出発点が存在するとしても、表現が社会的形式に表示される社会関係を、単なる表現科学的な意味理解の立場をこえることにより(二つの層に)隔離せず、また合理主義的認識方法に眼をつぶらないだけでなく、むしろそれらを方向指示的な・有意味な・内的に把握し理解された諸形態(Gestaltungen)として説明し、彼の仕方でまた彼の思考方法により有意味に理解さ

れた事実を、現実の現象として明確化し概念的に把握できるものにする努力が払われねばならない。数学的研究が、もともと数学的には把え得ない意味連関・形態様式 (Gestaltungsweisen)・形式を敬遠せずそれらに眼をむけるにしても、それらが現実的であるということを示すだけだったり、あるいは、それらを有意義なものではあるが、“非現実的”あるいは“非合理”な現象として思考領域から排除するだけならば、現実の社会認識の領域はそのような数学的研究によって決して十分に解明されるものではない。そして数学的研究が非現実的・非合理的な現象を彼等の思考領域から排除したとしても、このような現実社会の数学的研究によってはとらえられない諸形式が存在しないということにはならない。これとは逆に合理的なものの拒否はつねに Romantik の前兆である。その背後には現実に対する否定的態度がかくされている。現実からすでに排除されてしまったものを形式としてすくなくとも精神の内に保持しようとする願望は、科学的にはまったく不可解であるが知識社会学的には容易に理解できる意図である。マッケンロートは自己欺瞞に終らぬ理解社会学は社会批判にむすびつくと考えているが、これは社会の現実に対する積極的交渉は、このような排他的な態度からは得られないことをまったくよく示している。若しわれわれが実際に、“全ての社会的形式の破壊の時代”に生きており、それ故形式形成の課題が社会学にとっても緊急の意義を持っているとしても、現実認識の das Rationale を十分に利用しなければ、われわれはそれらの課題を解決しえないし、正しくとらえることさえも出来ないだろう。たしかに抽象的に設定された目的合理的行為とはことなり、社会形式は“Ratio からは生れず、自己の行為を他者の行為に同化するパーソナリティの鑄型の奥底から生ずる”だろう。だが“社会的なものの表現科学”としての社会学も、行為および事象連関としての社会の現実をすべての利用可能な思考手段によって研究することによってのみ成立する。表現科学としての特徴はそれによって決して失われることはない。何故なら表現や形式としての特徴の内にそれらの理解諸様式によってとらえ得ないものが残るからである。」(Ziegenfuss 230~231ページ)

最後の批判は合理化および因果性に関するマッケンロートの見地に対して行われる¹⁰⁰⁾。

「若しマッケンロートが“Verzwecklichung の進行”によって、今日 soziale Formenwelt が“ausdrucksleerer”となって行くことを確かめたならば、このような発展経過を辿る社会的現実の事実は事実として是認されねばならない。それ故 Max Weber は、いわば“意味”の最少限つまり目的合理的行為の関連としての社会に眼をつけ、かかるものとしての社会の輪廓を思惟的に描いたことになる。そしてマッケンロートがさらにわれわれに対し“文化全体が意味によって侵透されている”ことを明らかにしたとしても、それは Max Weber の解釈の否定ではなく、理解を一層豊かにするものに他ならない。それはいわば、一つのスケッチあるいは銅板画に彩色をほどこすことと同じである。彩色はスケッチや銅版画の無味乾燥な正確さを否定するものではなく、画像に一層の生彩を加えるだろう。マッケンロートは意味とは内在的なものであり、合理的目的に束縛されない“Beziehung eines lebendigen Vorgangs zu seinem Ziel”として現れると考える。このばあいもし“意味思想の合目的化”が“社会解釈におけるその生産的な適用に対する最悪の敵”であるとするならば、逆にそれが社会の内では実現されるばあいに、具体的なかつ多少とも合理的な目的の内では考えられないような価値は決して重要でも本質的でもないといわねばならない。芸術作品といえども、たとえそれがつねに“目的合理的”ではないにせよ、少なくとも合目的的な行為によって実現されるものだし、その際表現価値および意味の創出それ自体が同時に目的でもあるのである。

だがマッケンロートの否定的態度はさらに理解の前提にまでおよんでいる。Max Weber は動機を理由 (Grund) との関係によって規定した。そしてそれ以外のすべてを非合理的なものとして彼の認識領域から排除した。それとは逆にマッケンロートのばあいには、このような理由に志向している動

機は用をなさない。彼は“われわれの社会的な意味および形態体験 (Sinn- und Gestalterleben) は、もっぱら無意識に実現される”ものであり、自己反省的な知性によってはまったく間違っただけで、まったく間違っただけで動機づけられてしまうと確信している。そしてこの動機因果性こそ、有意味に諸連関から理解される行為を因果連鎖の内に押しこみ、結局自然的事実の代りに動機をもちこむ試みにほかならない。動機連関における思考が、表面的な因果的思惟に帰着する危険は、すでに言及した。それについては何等の疑問もあり得ない。理論的にも実際的にも、このような社会理解はまさしく表面的理解にとどまり、現実の意味をとらえることはできない。だがマッケンロートが因果的思惟を理解社会学の連関から追放してしまうならばそれは正しくない。体験の領域における意味連関が、一面において“目的づけ”から守られねばならぬと同時に、他方因果的な結合においてそれが概念的に具象化されえなくなればなるほど、どこに体験における意味連関の手掛りがあり、そもそも思惟によってとらえられる現象様式のどこにそれが見出されるかという疑問もますます深刻なものとなる。だがこの両者とも“社会的形式の領域”の内に存在する。社会的形式は特殊な客観性 (Gegenständlichkeit) として、社会現象の体験された意味内容に直接かつ表現保有的 (ausdrucksmässig) に関連している。」 (Ziegenfuss 231~232ページ)

〔注〕98) マッケンロートにおける Erlebnis の強調は、単なる外的刺激に対する反応として行動を把握する行動主義者の行動観に対する批判に関連して行われたものであり、それが表現理解の強調と関連はしているが、Ziegenfuss のように、その非合理主義的性格のみを強調してとらえるのは誤まりであろう。むしろ行動主義の批判や、Mombert の福祉説の批判においては、この客観的な諸条件の主體的体験を通しての濾過という観点はかなりの有効性をもっていたと思われる。

99) これは Ziegenfuss の表現の誤まりであり、虚的なものと目的的なものが二つの層をなしているのである。

100) この部分に関連したマッケンロートの見解は第10章 Die Prägekraft der Sinnzusammenhänge の最後の部分で行われている。